

中学校英語科において即興性を高める指導の工夫

—— 帯学習の中で、基礎・基本の習得と即興的なコミュニケーション活動を行う
学習シート『Hello』の活用を通して ——

長期研修員 林 秀多

《研究の概要》

本研究は、中学校英語科の主に「話すこと」の学習において、英語表現についての基礎・基本の習得と、コミュニケーション活動の中で習得した知識を活用する学習を行うことにより、即興的な発信ができる生徒の育成を目指したものである。そのために、学習シート『Hello』を用いて「基礎・基本となる定型文の習得」と「即興的な発信力を高めるためのコミュニケーション活動」を行い、帯学習を積み重ねながら生徒の即興的な発信力を高める学習を行った。『Hello』の活用が即興的に英語を発信する力を高めるために有効であることを、授業実践を通して明らかにした。

キーワード 【帯学習 基礎・基本となる定型文 即興的なコミュニケーション活動】

群馬県総合教育センター

分類記号：G09-02 平成28年度 259集

I 主題設定の理由

平成 25 年 12 月に文部科学省はグローバル化に対応した英語教育改革実施計画を発表している。社会のグローバル化が進み、経済・技術・環境問題などについて、各世代で英語で対話をする機会が広がっていることを背景に、実際に「英語が使える日本人」を育成する必要性が高まっている。

中学校学習指導要領における外国語学習の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」である。小・中・高等学校を通じて積極的に英語を使おうとする態度を育成しながら、聞くことや読むことを通じて知識を得ること、語彙や文構造を活用し、内容的にまとまりのある文章を書く力、そして自らの考えなどを相手に伝えるための発信力をバランスよく育成するため、4 技能を総合的に育成する指導を充実することが重視されている。

このように、英語を用いたコミュニケーション能力の育成が必要であるとされているが、文部科学省「外国語ワーキンググループにおける主な意見」（2016）では、中・高等学校においては、「英語を用いて何ができるようになったか」よりも、「文法や語彙などの知識がどれだけ身に付いたか」という点に重点を置いて授業が行なわれており、コミュニケーション能力の育成を意識した取組が不十分な学校もあるとの指摘がされている。今後の中学校の英語指導においては、確かな学力を身に付けさせることはもとより、コミュニケーション活動のより一層の充実・高度化が求められると考える。

「ぐんまの子ども基礎・基本習得状況調査」（2014.7）では、「英語の話（ALT によるボランティアの紹介という設定）を聞き、内容に関する英語質問に適切に応じている」という問題に対して、正答率の平均が 30.3%と低い。また、「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」での意識調査では、本県の 56.2%の生徒が「英語を話すのが難しい」と答えている。このように英語における「話す」技能に難しさを感じている生徒が多い中、目標の差があるものの、本県の 95.0%の生徒が英語を身に付けたいと答えており、英語を話すことについての必要性を多くの生徒が感じている。

群馬県学校教育の指針では、「自分の考えや気持ちを英語を使って相手に伝えたり、質問し合ったりする即興的なコミュニケーション活動を継続的にこなう」ことを示している。その背景には、生徒が自分の考えや気持ちを英語を使って相手に伝えたり、質問し合ったりする活動を行う場面において、わずか一文であっても事前に原稿をワークシートに書かせるなど準備をさせ過ぎているといった指導上の課題がある。

また、所属校の生徒の実態を考察すると、英語を「話すこと」における活動において、自分の意見や考えを表現することが苦手な生徒が多く見られる。例えば生徒は文の一部を入れ変えて対話することはできるが、展開させて続けることは難しい。

上記の理由から、本研究では、中学校英語科でのコミュニケーション能力の育成のために、「話すこと」に関わる領域を枠組とする「即興的なコミュニケーション活動」を中心に研究を実践し、その有効性を検証する。

II 研究のねらい

中学校英語科において、即興的に英語を発信する力を高めるために、基礎・基本の習得と、即興的なコミュニケーション活動を行う学習シート『Hello』を活用し、帯学習で行うことの有効性を授業実践を通して明らかにする。

III 研究仮説（見通し）

本研究では、生徒は英語を「話すこと」を通して、知識の活用を行ったり経験を積み重ねたりすることによって、即興的に英語を発信する力を高めることができると考え、帯学習において『Hello』を継続して学習することとし、以下の見通しを立てる。

1 基礎・基本となる定型文を習得させる「Hello 1」

基礎・基本となる定型文を習得する過程で、「Hello 1」を用いて学習することにより、即興的に英語を発信する場面で必要な言語材料を習得することができるだろう。

2 即興的な発信力を高めるためのコミュニケーション活動を行う「Hello 2」

場面設定や会話のルールなどを示した「Hello 2」を用いてコミュニケーション活動を行うことにより、「Hello 1」で習得した知識や、会話に必要な知識を活用することで、生徒は即興的に英語を発信する力を高めることができるだろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 即興的に英語を発信する力とは

本研究における即興的に英語を発信する力とは、コミュニケーションの場において、相手意識を持ちながら、相手が伝えようとすることに適切に応じ、相手に質問したり、自分の意見などを相手に伝えたりすることができる力とする。

また、生徒が英語を話す際に、正確さよりも伝えたい内容を重視し、すべて正しい英語にならなくても、英語を用いてその場での対応ができることとする。

○「即興的に英語を発信する力」を身に付けた生徒像

- ・対話の中に「相づち」や「聞き返すこと」などを取り入れ、相手の伝えようとすることを理解しながら、適切に応じている。
- ・対話の中で即興的に「相手に聞いてみたいことを質問する」「自分の意見や考えを伝える」など、会話の展開に合わせて表現をしている。

○指導の重点

生徒自身が「自分の意見や考えを英語を使って相手に伝えることができた」「英語を使ってコミュニケーションすることができた」と実感し、自信につなげることを指導の重点とする。

○相手意識

本研究での相手意識とは、相手のことを考え、自分の伝えたいことを聞き手に分かりやすく表現することや、話者に対して積極的に話を聞く態度を持つことと捉える。

(2) 『Hello』とは

『Hello』は、生徒に身に付けさせたい基礎・基本となる定型文と、コミュニケーション活動を行うための場面設定や、対話のルールが示されている学習シートである。本学習は毎回の授業に15分程度の帯学習で行う。『Hello』は学習計画に合わせて「Hello 1」→「Hello 2」の順で使用し、「Hello 1」と「Hello 2」を合わせて『Hello』と表す。

① 基礎・基本となる定型文を習得させる「Hello 1」

第一の段階として、基礎・基本となる定型文の習得をねらいとした学習を行う。

「Hello 1」は、単元の Lesson (Unit, Program) ごとに習得したい言語材料を対話の形にまとめたものである(図1)。ここでは言語材料を精選し、短時間で学習できるように工夫した。また、題材は教科書の内容に沿ったものや、生徒にとって親しみやすい話題とした。生徒は「Hello 1」に提示された定型表現を用いて「話すこと」「書くこと」について二技能による学習を行う。

不 同 の 場 面 に あ つ け ら れ た 言 	01	What are your plans for the future?	将来の予定(夢)は
	02	I want to be a teacher.	先生になりたい。
	03	Do you want to teach English?	英語を教えるの、好きですか?
	04	Yes.	はい。
不 同 の 場 面 に あ つ け ら れ た 言 	01	Did you go anywhere last Sunday?	先週の日曜日どこへ行きましたか?
	02	Yes, I went to Chiba to see my friend.	はい、私は千葉へ友達の家に行きました。
	03	What did you do there?	そこで何をしましたか?
	04	We bought some gifts.	私たちは買い物しました。

Callout 1: 生徒に身に付けさせたい新出言語材料 (points to 'I want to be a teacher' and 'Do you want to teach English?')

Callout 2: 生徒に親しみやすい題材 (points to 'Did you go anywhere last Sunday?')

図1 「Hello 1」主要部分

② コミュニケーション活動で即興的に英語を発信する力を高める「Hello 2」

基礎・基本となる定型文を学習した次の段階として、「Hello 2」を用いてコミュニケーション活動を行う。「Hello 2」は、コミュニケーション活動を行うにあたって必要な場面設定や学習課題（図2）と、コミュニケーション活動における会話のルールを示したものである（P10 図6）。

「Hello 2」では、「Hello 1」で身に付けた知識を活用しやすい場面設定をおこない、会話のルールは生徒にとって分かりやすい図を用いて示した。生徒は「Hello 2」に示された場面設定・学習課題に沿ってコミュニケーション活動を行った後、対話内容を書く学習を、「話すこと」と「書くこと」の二技能での学習を行う。

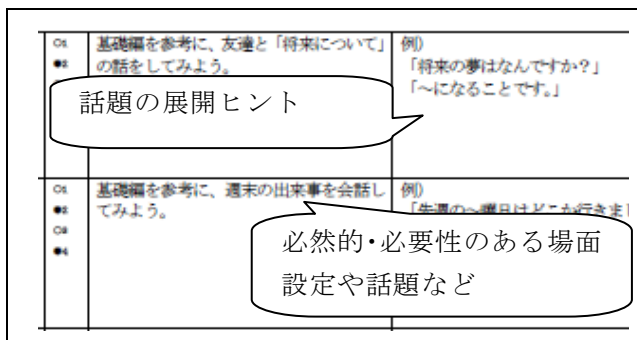


図2 「Hello 2」主要部分

(3) 会話のルールとは

生徒がコミュニケーション活動を円滑に行う上で重要と考える「相づち」や「聞き返すこと」などを含む会話の展開などを示した「会話のルール」を作成した（表1）。また、生徒に対してはルールを可視化し、わかりやすくするために図解したものを提示している（P10 図6）。

本研究では、非言語による表現はコミュニケーション活動を円滑に行う上で重要であり、相手の顔を見ることや表情、ジェスチャーを生徒に意識させることとした。

英語でのコミュニケーション活動における日本語の表現については、どうしても英語で表現することができないような未習の単語は日本語を使うことはやむを得ないが、原則として英語で表現することを目標とする。

表1 会話のルール（学習シート『Hello』には図解したものを掲載する）

ルール内容	適用場面	具体的な言葉など	生徒に意識させたい事柄
対話の進め方	会話の始まり	Hello. など	挨拶すること
	会話の途中	Uh-huh. Pardon? Are you ~? Do you ~? など	・相手の話を聞くときに「相づち」「聞き返すこと」などで相手意識を表現すること ・シャドウイング（リキャスト）によって、発話内容を理解するとともに、相手意識を表現すること ・疑問文などを使って自分の聞きたいことを表現すること
	会話の終わり	Nice talking with you. など	会話の終わりに挨拶をすること
基本的な態度	会話全般	・相手の顔を見る ・ジェスチャーを加える ・「相づち」などをしながら、相手が伝えようとするのを積極的に理解しようとする	・特別な語彙などを除き、全て英語で表現しようとする姿勢を持つこと ・間違えることを怖がらないこと

(4) 会話に必要な知識とは

コミュニケーション活動など実際に英語を使用する場面においては、英語の学習によって身に付けた単語や文などの文法面だけの知識だけでは、英語を話すことは難しいと考える。

Canale & Swain(1980)によれば、英語を実際に運用するには、英語にかかわる文法的能力と、文化的背景に基づく社会言語学的能力、さらに話題の展開や、場面に適切な表現を考える力（方略能力）が必要だとしている。

本研究における中学校英語科でのこうした能力については、「会話のルール」に示す簡潔な図などを利用して分かりやすく提示し、経験としてコミュニケーション活動の中で身に付けさせたいと

考える。

(5) 帯学習について

生徒は、日々の学習から、コミュニケーション活動での必要な知識を習得している。しかし、英語を話す経験が少ないことや、正確な英語を表現しようとするあまり、英語を話すことに自信が持てなかったり、知識を活用することができなかつたりして、結果として充実したコミュニケーション活動ができていない。

英語を話す際、即興的に自分の伝えたいことを表現したり、相手の伝えようとすることを理解するためには、多くの経験が必要であり、日常の学習の中に「英語で会話をする事」を取り入れたいと考えている。

また、中学校英語科の学習では、「読むこと」や「聞くこと」など、他の技能も大切な学習課題であり、他の技能と共に、バランスの良い指導を行うことが大切である。

本研究では上記のような課題を考慮し、「英語を話すこと」にかかわる学習を繰り返し積み重ねていくことが重要と考え、帯学習として15分程度の短時間学習を取り入れ、計画的に行なうとした(表2)。

表2

単元を見通した指導計画 (8時間の例)			
基礎・基本となる定型文の習得とコミュニケーション活動での即興的な発信力を高める学習			
ねらい	時間	学習内容	評価
基礎・基本となる定型文の習得	1～4	基礎・基本となる定型表現を「話すこと」「書くこと」の二技能での学習を行うことで、正確に習得させる。	<ul style="list-style-type: none"> 対話の見取り 生徒の記述した英語
コミュニケーション活動での即興的な発信力を高める学習	5～7	<ul style="list-style-type: none"> 学習ルールや場面設定についての確認後、ペアあるいはグループでのコミュニケーション活動を行う。 コミュニケーション活動を行った後、対話内容を書く学習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 対話の見取り 生徒の記述した英語 自己評価「ループリック」
	8	ペアやグループでのコミュニケーション活動の発表を見て、対話の工夫などについて学び合う。	<ul style="list-style-type: none"> 対話の見取り 生徒の記述した英語 パフォーマンステスト

(6) コミュニケーション活動での即興的な発信力についての評価

定期テストなどで英語の力を十分に発揮できない生徒が、コミュニケーション活動などで活躍し、クラスメートとの相互評価によって自信を持つ姿が指導過程で見られる。また、英語で行う授業を充実させることにより、生徒の発話量を増やすとともに、コミュニケーション活動の中で、生徒の表現力を観察することができる。このことから、評価は次の方法で行うこととした。一つは、自己の伸長を振り返り、学習の成果や課題を見付け、自己の目標を持たせるために、自己評価(ループリック)を行う(図3)。生徒は自己評価から学習目標を明確にし、具体的な取組につなげることができる。二つ目は、パフォーマンステストを行い、教師の見取りによる英語の表現力に関わる評価を行う。パフォーマンステストは、Can-Do リスト(英語を用いて何ができるか)の面から設定されたゴールを設定するので、例えば、単元のゴールとしてパフォーマンステストを実施し、筆記テストと合わせながら単元ごとの評価につなげたい。

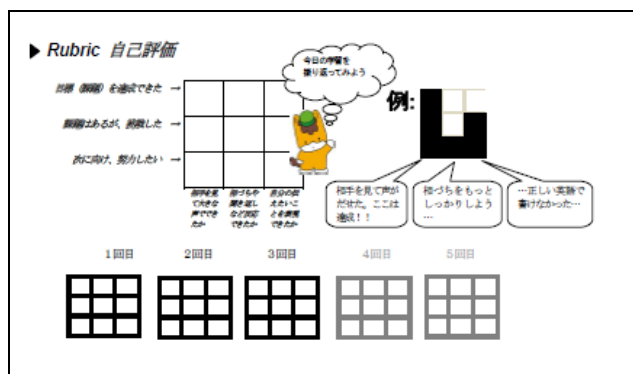


図3 ループリック表(自己評価)

(7) 二技能で行う学習について

本研究においては、学習指導要領の目標「(2)初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。」での、「書くこと」「(イ)語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと」を重点の一つとしたいと考える。

生徒はコミュニケーション活動において英語を表現するとき、おもに口頭で表現を行なう。このとき、表現したことが文法的に正確でないなど、不正確な英語の習得につながってしまうことが懸念される。一方、表現に対して正確性を求めると、生徒のコミュニケーション活動に対する消極性が見られたり、間違いを恐れたりすることから発信する内容が簡素なものになりがちである。そこで、『Hello』では「話すこと」「書くこと」の二技能での学習を行う。「話すこと」によりコミュニケーション活動での意欲的な発信を促し、対話の充実を図りながら、「書くこと」により英語表現の正確性を身に付けさせたいと考える。

2 研究構想図



V 研究の計画と方法

本研究では、第一回および第二回授業実践を行う。研究を段階的・計画的に行なうために、第一回授業実践の結果と考察を踏まえ、第二回授業実践を行うこととする。以下に第一回授業実践における結果と考察、ならびに第二回授業実践における研究の計画と方法を示す。

1 第一回目授業実践

(1) 実践の概要

対象	所属校（研究協力校）中学校第2学年
期間	平成28年6月27日（月）～平成28年7月13日（水）
教材名	Sunshine English Course2 Program3 “Charity Walk”

(2) 第一回目の授業実践の結果と考察

① 結果

「Hello 1」を用いた「基礎・基本となる定型文の習得」では、口頭練習から書く学習までの活動におよそ抽出生徒Aで10分程度、最後の生徒で15分程度の時間を要した。抽出生徒A、Bでは、基本文をほぼ書いて表現でき、「Hello 1」を見て答えとなる文を写す様子は見られなかった。生徒の記述では、書かれる英文の文法のミスはほとんど見られないが、単語の綴りの誤り、ピリオドなどの表記上のルールに誤答が多く見られた。抽出生徒Cは、口頭練習のとき、パートナーとなる生徒のヒントなどを頼りに「Hello 1」を読むことができたが、書く学習になるとほとんど文を書くことができず、「Hello 1」の文を写す学習にとどまった。「Hello 2」を用いたコミュニケーション活動では、スムーズに学習に移行することができなかった。抽出生徒Aは意欲的に活動に取り組んでいたが、4文程度の対話であった。また、自分の予期しない話題や相手からの反応になると、抽出生徒Aでも返答に困ったり、どう表現しているのか分からず困惑したりする様子が見られた。対話内容を見ると、「Hello 1」で習得した基本文を利用してコミュニケーション活動を行っていた（図4）。抽出生徒A2の発話は、「Hello 1」にはない言語材料であり、対話の内容にふさわしい即興的な表現が表れているが、発信するまで時間がかかった（図4 A2太字部分）。

A1: Can you come to the Mr. Hayashi is birthday?
A2: Yes, I can. But I don't know Mr. Hayashi's birthday.
A1: Birthday, birthday?
A2: Me, too. Shall we ask Mr. Hayashi's birthday party?
A1: ...Yes, let's.

図4 抽出生徒Aの対話例

注：文法的に不正確な表記については訂正せず掲載している

② 考察

抽出生徒A、Bでは、会話活動に主体的に取り組む様子が見られた。しかし、表現しようとする内容が短く、単語だけでの返答など不十分な内容で終わってしまっているものも多く見られた。相づちなどを意識して相手意識を表現しようとしているが、形だけになっていたり、単調な繰り返しになっている。自由記述に記載されている内容では、「今の『Hello』を続けてほしい。」という意見が全体の半数以上の記載に見られた。また、「今の学習課題を発展させ、どのくらい会話を続けることができるかやってみよう」などの意見があった。このことから、『Hello』を続けていき、生徒に対話におけるポイントを明確に提示したり、対話の展開などを分かりやすく示すなどを『Hello』に提示する必要があると考察する。

2 第二回授業実践

(1) 実践の概要

対象	所属校（研究協力校）中学校第2学年
期間	平成28年9月27日～平成28年10月19日
教材名	Sunshine English Course2 Program 6 “A Work Experience Program”

(2) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1 基礎・基本となる定型文を習得させる「Hello 1」	基礎・基本となる定型表現を反復して学習することにより、コミュニケーション活動において土台となる知識を身に付けることができたか。	① 授業の様子の観察 ・教師の見取り ・記録用画像 など ② 学習ノートの記述内容 ・生徒の記述
見通し2 即興的な発信力を高めるためのコミュニケーション活動を行う「Hello 2」	「Hello 1」で学習した知識を活用したり、「会話のルール」などを生かしたりしながらコミュニケーション活動の中で即興的な発信をすることができたか。	① 授業の様子の観察 ・教師の見取り ・記録用画像 など ② 学習ノートの記述内容 ・生徒の記述


(3) 抽出生徒

A群	・コミュニケーション活動に主体的に取り組むことができるが、対話を続けることができない。英語の学力は全体的に高い。英語表現に関する問題では、必要な言語材料を用いて書いて表現することができる。
B群	・コミュニケーション活動では、自分の考えなどを主体的に表現することが苦手である。英語の学力は全体的に高い。英語表現に関する問題では、必要な言語材料を用いて書くことができるが、語彙などに間違いが見られる。
C群	・コミュニケーション活動において主体的に取り組むことが苦手である。必要な語彙が十分に身付いていないため、自分が伝えたいことを表現することが課題である。

(4) 評価基準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
主体的に学習に取り組み、自分が伝えたい事柄を意欲的に相手に伝えようとしたり、相手が伝えようとするのを的確に聞きとろうとしたりしている。	自分が伝えたいことなどを、適切な言語材料を用いて表現することができる。	相手の伝えようとすることを「相づち」「聞き返し」などを用いながら的確に聞き取ることができる。	英語についての語彙、文法などの知識があり、相手に自分の考えが伝わるように、適切な語句を選択して使っている。

(5) 指導計画

時間	○主な学習活動 □ 帯学習	★研究上の手立て ◆評価(評価方法)【観点】	評価の観点				学習シートの利用
			関	表	内	知	
1	○学習プリントを用いて不定詞 to～(名詞的用法)の用法を理解する。 単元の学習の見通しを立てる。 ★『Hello』を配布し、学習内容を知る。				○	Hello 1 	
2	○学習プリントを用いて不定詞 to～(副詞的用法)の用法を理解する。 基礎・基本となる定型文1の口頭および書く練習(不定詞名詞的用法) ★口頭練習によって基礎・基本となる定型文を習得し、書いて表現する二技能で学習を行う。 ◆口頭練習した定型文を正しく書いている。(ノートの記述)【表】				○		
3	○学習プリントを用いて不定詞 to～(形容詞的用法)の用法を理解する。 基礎・基本となる定型文2の口頭および書く練習(不定詞副詞的用法) ★口頭練習によって基礎・基本となる定型文を習得し、書いて表現する二技能で学習を行う。 ◆口頭練習した定型文を正しく書いている。(ノートの記述)【表】				○		

4	○教科書本文 Unit 1 の内容について理解をする。 基礎・基本となる定型文 3 の口頭および書く練習③ (不定詞形容詞的用法) ★口頭練習によって基礎・基本となる定型文を習得し、書いて表現する二技能で学習を行う。 ◆口頭練習した定型文を正しく書いている。(ノートの記述)【表】	○		◎		
5	○教科書本文 Unit 2 の内容について理解をする。 即興的なコミュニケーション活動 1 (おもに不定詞名詞的用法) ◆「Hello 2」のルーブリック表(自己評価)【関】 ★「会話のルール」を用いて話題の展開の見通しを持ち、「場面設定」によって与えられた話題からコミュニケーション活動を行う。	○		◎		
6	○教科書本文 Unit 3 の内容について理解をする。 即興的なコミュニケーション活動 1 (おもに不定詞名詞的用法) ◆「Hello 2」のルーブリック表(自己評価)【関】 ★「会話のルール」を用いて話題の展開の見通しを持ち、「場面設定」によって与えられた話題からコミュニケーション活動を行う。	○		◎		
7	○Listening & Writing の内容について理解する 1 即興的なコミュニケーション活動 1 (おもに不定詞名詞的用法) ◆「Hello 2」のルーブリック表(自己評価)【関】 ★「会話のルール」を用いて話題の展開の見通しを持ち、「場面設定」によって与えられた話題からコミュニケーション活動を行う。			○		
8	○Listening & Writing の内容について理解する 2 即興的なコミュニケーション活動 1 (おもに不定詞名詞的用法) ◆「Hello 2」のルーブリック表(自己評価)【関】 ★「会話のルール」を用いて話題の展開の見通しを持ち、「場面設定」によつたえられた話題からコミュニケーション活動を行う。			○		

Hello 2

VI 研究の結果と考察

1 基礎・基本となる定型文を習得させる「Hello 1」

(1) 生徒全体の様子

① 結果

生徒は、「Hello 1」に提示された定型表現を習得するために、「話すこと」「書くこと」の二技能で学習を行った。学習の様子を観察すると、ほとんどの生徒は口頭練習をおよそ5分程度で終了し、すぐに文を書く活動を始めている。早い生徒は、開始から7分程度で学習が終了している。学習のゆっくりとした生徒で約10分であった。生徒が書き終わった段階ですぐに挙手をし、教師の確認を受ける。表記上の誤り(大文字、小文字の使い分け、ピリオド、単語の綴りミス)が見られた生徒が4割程度、ほとんど書くことができずにいる生徒が数名見られた。書くことができず、学習が進まない生徒については、「Hello 1」を見て、写すのではなく、できるだけ書けるところは自分の力で書くように指導し、全文を書くこととした。実践後のアンケート結果では、「Hello 1」を用いて「基礎・基本となる定型文」を口頭練習することで「英語が覚えやすくなった。」という回答が見られた。

② 考察

「Hello 1」での活動は、第一回の実践と比較し、口頭練習から書く活動に必要な時間が少なくなったことから、帯学習によって繰り返し学習することで、口頭練習から書く学習までの取組が定着したことが分かる。生徒の書いた文を見ると半数以上の生徒が正確に書いて表現でき、単語の綴りなどに精

○	What are you going to do next Sunday?
●	I'm going to go cycling.
○	If it's sunny, I'll go walking.
●	Good.

図5 生徒が書いた原稿

が分かる。生徒の書いた文を見ると半数以上の生徒が正確に書いて表現でき、単語の綴りなどに精

度の向上が見られる(図5)。

生徒は、口頭練習の後、定型文を正確に書くことなど、学習の目的意識を持って学習することができていると考えられる。「Hello 1」について、学習の重要度アンケートでは、ほぼ全員の生徒が口頭練習と書く学習について「重要である」とアンケートで答えている。教師の見取りの面からも、文を覚えようとする意欲の高まりや、書くことで「基礎基本を正しく習得する」ことについて意識向上が見られ、二技能を関連付けて活動を進めることは学習の充実につながっていると考えられる。このことから、「Hello 1」を用いて基礎・基本となる定型文を学習することにより、即興的に英語を発信する場面で必要な表現を身に付けることができたと思われる。

(2) 抽出生徒の様子

① 結果

「Hello 1」の学習において抽出生徒Aは、口頭練習を短時間で終え、その文をすぐに書いて表現する学習を始めていた。書かれた文を確認すると文法や綴りのミスはほとんど見られなかった。さらに、学習活動に必要な時間も短くなった。抽出生徒Bは、基本文を記憶し、書いて表現することができていた。「Hello 1」を見て、答えとなる文を写す様子は見られず、日本語訳を見て書き始めを確認する程度の様子であった。書かれる英文の文法、綴りなどのミスはほとんど見られないが、ピリオドなどの表記上のルールにミスが見られた。活動に必要な時間も抽出生徒Aと同様に短くなった。抽出生徒Cは、口頭表現での活動は意欲的に行なっていたが、書く学習では語彙の不足などから文を書くことができない様子が見られた。

② 考察

上記の結果から、抽出生徒A、Bの生徒は「Hello 1」を用いた「基礎・基本となる定型表現」の学習をスムーズに進めていることが考察できる。また、生徒の記述から表記上のルールを意識させる必要性を確認することができた。抽出生徒Cについては、「Hello 1」に載せられた定型表現をまず口頭でしっかりと学習させ、少しずつ全文を書くことができるように指導内容を工夫することを確認した。

2 即興的な発信力を高めるための「Hello 2」

(1) 生徒全体の様子

① 結果

コミュニケーション活動の場面では、「Hello 1」で習得した文を利用しながら対話を開始する様子が見られた。「Hello 1」で習得した文を基に、生徒は「Hello 2」の活動にスムーズに取り組みている。対話の様子から、「相づち」や「聞き返すこと」の表現、自分が聞きたいことを疑問文を使って表現するなど、意見を伝え合う姿が見られた。

口頭による対話が終了した時点で、対話内容を書く学習を行った。生徒の記述では、語彙の不足による単語の間違いや文法上の誤答があったが、ほぼ相手に伝わる英語で表現していた。

② 考察

まず、「Hello 2」の学習に取り組むとき、「会話のルール」(図6)を用いて対話の展開について確認をしている。これは、実際の会話の場面を想定し、対話の流れを確認するものである。「挨拶をすること」「相手の話を聞くときには必要に応じて『相づち』『聞き返すこと』などを行うこと」「話を終わりにするときの挨拶を行うこと」の三点を重点として確認している。この説明の後、




会話のルール		
ルール1 相手意識を持つ ☆相手の顔を見て ☆ジェスチャーも言葉の1つ ☆何とか伝えようとする気持ち		
ルール2 会話の基本 (次の3つを必ず使おう) ① 挨拶をする ②相手の話を聞くときは「相づち」などをする ③終わりの挨拶をする		
1. 初めのあいさつ 	2. つなぎ言葉  Uh-huh. / Pardon? / Really? Do you ~? (質問する) など	3. 終わりのあいさつ 

図6 会話のルール

生徒はコミュニケーション活動をおこなった。生徒はこの「会話のルール」の流れに沿って対話を開始した。生徒のコミュニケーション活動の開始部分をスムーズに始めることができると、それに続く対話活動が活性化し、楽しさを感じながら英語を発信する様子を観察することができた。

対話活動が活性化した理由は、まず対話の流れを確認したことで、見通しを持ちながら対話活動を始められたことが挙げられる。さらに、「相づち」や「聞き返すこと」などで積極的に相手の話すことを理解することで、相手が伝えようとしていることを自信を持って聞いたり、自分が表現したいことを発信したりすることにつながったと考察できる。また、コミュニケーション活動の場面設定が「Hello 1」で扱った題材や言語材料に関連付けてあり、習得した表現を利用しているので、既習の知識を活用しやすかったと考える。

実践後のアンケートでは「学習ルールで決まっているので、どう答えればよいかわかった」「『相づち』や『シャドウイング』をすることで、相手の言っていることが分かってきた」などの記述が見られた。また、「基本文を覚えて、それが言えるとすごくうれしくなる」などの記述から、習得した知識を活用することの楽しさなどが、コミュニケーション活動の活性化や、即興的な発信力の一助となったと考えられる。

以上のことから「Hello 2」を用いてコミュニケーション活動を行い、「Hello 1」で習得した知識や、会話に必要な知識を活用することで、生徒は即興的な発信力を高められたと考察できる。

(2) 抽出生徒の様子

① 結果

「Hello 1」で身に付けた定型文から、抽出生徒A1の話題に対し、抽出生徒A2, A3はその話題に沿って自分の意見を表現している。抽出生徒A1は対話の展開の中で即興的に自分の聞いてみたい事柄を質問している(図7 抽出生徒A1～3 4行目)。即興的な質問に対して単調であるが、即興的に返答している(図7 5～6行目)。

図8の対話例は、抽出生徒Aと抽出生徒Cの対話である。抽出生徒A1が対話全体をリードして、抽出生徒C1は、質問に対して答えることができた。対話の中でわからない単語が出てくると、その単語を聞き返したりして相手に自分が理解できないことを伝えている。

② 考察

抽出生徒Aの対話では、「Hello 1」の定型文を利用した表現を主に使って、意見がある程度自由に述べ合うことができています。

即興的な発信という視点を考察すると、抽出生徒A1は定型文を活用しながら話題を展開させた後、「趣味がありますか」と即興的に話題を展開させている。これに合わせて他の抽出生徒は自分の意見を述べることでできている。抽出A3は適切な表現をして発信力を持っているといえるが、それに続く抽出生徒A2も抽出生徒A3の表現を適切に理解し、同じ表現を使って表現している(図7 4～7行目)。「相づち」「聞き

	Hello. I want to be a police officer.
1	A1: Because I' m playing Kendo. And Police Officer is cool.
2	A2: I want to be a Hoikushi. Because I like children.
3	A3: I want to be a hair stylist. Because I like children.
4	A1: Do you have hobby anything?
5	A3: My hobby is go shopping.
6	A2: My hobby is play with my friend. How about you?
7	A1: My hobby is to play games and watching TV.
8	A2: Are you Otaku?
9	A1: …Yes.
10	A2: Really?
11	A3: Oh, good! It nice. Nice talking.

図7 抽出生徒Aの対話例

注：文法的に不正確な表記については訂正せず掲載している

A1: Hello. I want to be a teacher. What are your plans for the future?
C1: I want to be a table tennis player.
A1: Good. Do you like table tennis?
C1: Yes.
A1: I don' t know table tennis rule. Tell me.
C1: Rule? Tell me?
A1: Tell me…(ジェスチャー)

図8 抽出生徒A, Cの対話例

注：文法的に不正確な表記については訂正せず掲載している

返すこと」などの学習を通して、自分の表現したいことを発信するために対話中の表現を効果的に利用したり、周囲に合わせた発信することが出来たと考察できる。

相手意識を持つという視点を考察すると、抽出生徒A1, C1の対話では、抽出生徒A1が対話の展開を作り、質問を工夫しながら発話している(図8)。抽出生徒A1の相手意識が質問の工夫を促していると考えられ、抽出生徒Cは、自分の伝えたい事柄を発話することがほとんどできない生徒であったが、抽出生徒Aの対話の展開と、「Hello1」で習得した知識を利用することで、自己の考えを表現することができた。また、抽出生徒C1が、自分分からない単語を相手に「聞き返す」ことで、対話が成立している。このことから対話の展開を学習することは、抽出生徒C1の主體的な学習を助け、即興的な発信につながったと考えている。

3 帯学習について

(1) 生徒全体の様子

① 結果

第一回と第二回の授業実践時の「Hello2」での対話文を示す(図9,10)。第一回の授業実践の段階では「Hello1」で習得した表現だけを利用する文が多かったが第二回授業実践では対話の中で自分の意見や相手に聞いてみたいことを表現し話題を広げている。(図10 3、7行目)。

② 考察

授業実践前後でおこなったアンケート結果では、即興的な発信力に対する意識の変容として、「対話の中で情報などを付け加える」ことや「相手の話の内容に質問することができるようになった」と感じている生徒がそれぞれ24ポイント、21ポイント増加している(表3,4)。この結果から、帯学習での繰り返し学習を通して自分の意見や伝えたい事柄を発信する力が少しずつ身に付いてきたと考察できる。

このような結果から、『Hello』を用いて帯学習で繰り返し学習することは生徒の即興的な発信力の向上を促していることがうかがえた。

また、「Hello」を学習する重要度について調査したところ、回答は表5の通りであった。「Hello」による基礎・基本となる定型文の習得と、コミュニケーション活動における即興的なコミュニケーション活動を口頭および書く二技能で学習することに対して、いずれも生徒が重要な学習であるということが分かる。

1	B1: You must do your homework.
2	A1: No, I' m going to go to AEON with my friend. I' m going to go shopping there.
3	B1: Oh! You must do your homework.
4	A1: OK! Nice talking.

図9 第一回授業実践 抽出生徒A, B対話例

1	B1: Hello. What are your plans for the future?
2	A1: I want to be a fire fighter.
3	B1: That' s great.
4	A1: Because I think that' s cool. How about you?
5	B1: I want to be a English teacher.
6	A1: Wow. What do you want to be an English teacher?
7	B1: Because I' m good at English. Nice talking.

図10 第二回授業実践 抽出生徒A, B対話例

注：文法的に不正確な表記については訂正せず掲載している

表3 対話の中で情報を付け加えたりして、1文以上会話を広げることができる

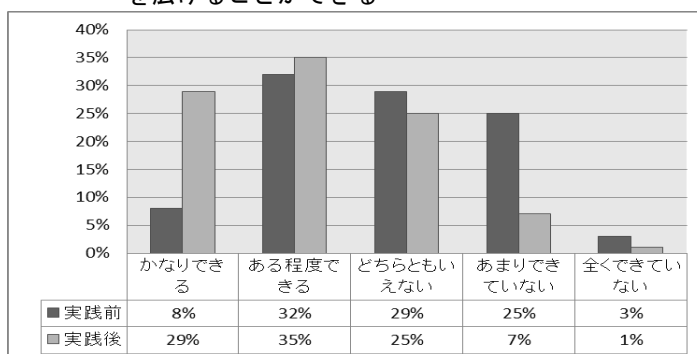
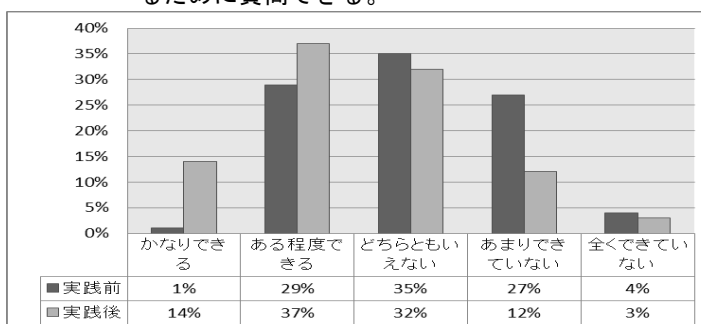


表4 相手の言ったことに対してさらに詳しい情報を得るために質問できる。



アンケートの自由記述に記載されている内容では、「声に出して表現することで覚えやすくなり、後で思い出したときに、すぐ頭に出てくるようになった」「基本文を書くために、完璧に覚えようという気持ちが出た」との記載が見られた。また、「(校外学習で)電車で外国人と話したとき、相づちを使ったら褒められた。すごく役に立った」などが記されていた。実践的コミュニケーションの中で学習の効果を生徒が実感できたことが分かる。

(2) 抽出生徒の様子

① 結果

第二回授業実践の最後に、コミュニケーション活動においてできるだけ長く対話を続けることを目標とする対話活動を行った(図11)。場面設定は「週末の出来事」とした。生徒は活動に主体的に取り組む姿が見られた。帯学習の中、繰り返し身に付けた「相づち」「ジェスチャー」を用いて相手意識を表現したり、即興的に相手に質問したりする様子が見られた。

また、場面設定に対し、より正確な表現をしている様子が見られた。(図11 抽出生徒A1 12行目)。

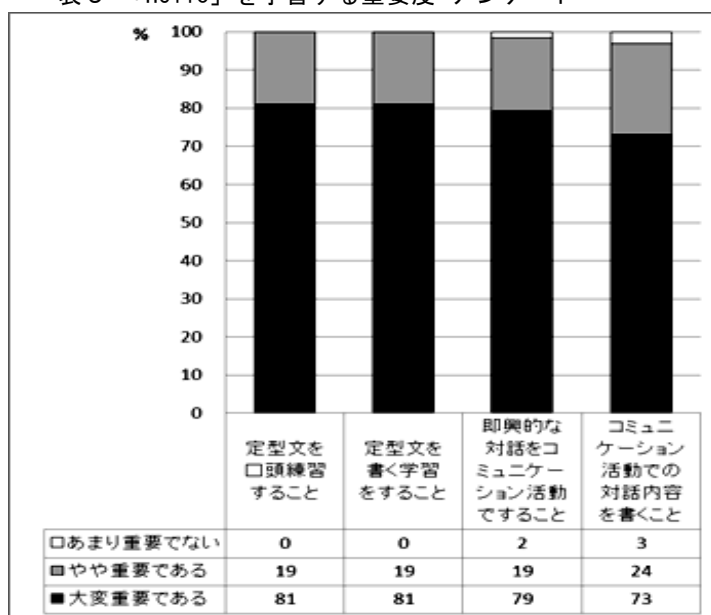
② 考察

生徒は与えられた題材に対して、自分の意見を述べ合うことができた。さらに、相手に聞いてみたい事柄を随時対話の中で表現しながら対話を展開していた。また、ここでの対話内容は実際に生徒たちの週末の行動を表現しているものであることから、実際の場面で交わされた内容も表現されている。

帯学習を通して、コミュニケーション活動の中で「即興的な表現を発信する」経験を積むほど、自分の意見や考え、相手に聞いてみたいことなどを質問することができるようになり、対話の展開が広げられたり、表現を豊かにすることができたりすると考えられる。

口頭で表現した内容を書かせたところ、記号表記や単語のミスなどがいくつか見られた。書く学習では、文法的な間違いに気付くことができた。文法上の正誤の確認などを意識しながら学習できる積極性を育成することが課題であると考えられる。

表5 「Hello」を学習する重要度 アンケート



1	A1:Hello. What did you do last Sunday?
2	A2:I went to Takasaki. How about you?
3	A3:I went to Maebashi.
4	A2:What did you do there?
5	A3:I practiced golf.
6	A1:Do you like golf?
7	A3:Yes. - How about you?
8	A2:I practiced tennis.
9	A3:Oh...Do you like tennis?
10	A1:Yes.
11	A3:I' m hungry.
12	A1: Oh, really? We are thirsty. I' m not...we are not hungry.
13	A3:Let' s go restaurant.
14	A1:No...I don' t have money.
15	A3: I have money...oh, I have many money. I' ll buy drink...there.
16	A1:Oh, thank you. What do you like?
17	A3:I like coffee.
18	A2:I like café au lait. Nice talking.

図11 対話活動例

注：文法的に不正確な表記については訂正せず掲載している

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 『Hello』の活用を通して、言語材料を習得しながら、対話に必要な知識を活用する方法を学習したことで、生徒は会話の展開の仕方や対話の方法を理解し、場面に合わせて即興的に発信する力を高めることができた。
- 帯学習において、『Hello』を用いた学習方法を定型化したことにより、基礎・基本の習得と、即興性を高めることをねらいとしたコミュニケーション活動を短時間で継続的に学習することができた。

2 課題

- 『Hello』は、基礎・基本となる定型表現の習得と、コミュニケーション活動における即興的な発信力を高める学習を「話すこと」「書くこと」の二技能で学習できるように作成してある。『Hello』を効率よく活用するためには、生徒の実態に合わせた支援を計画的・段階的に行なう必要がある。

Ⅷ 提言

1 帯学習を通しての継続的な学習

コミュニケーション活動の場において、即興的に英語を話す力はすぐに身に付くものではない。日々の学習の積み重ねや、学習に向かう姿勢を身に付けさせるためには、継続的な指導が大切である。本研究で提案した『Hello』の利用を通し、英語を話す活動を日常化することで、生徒は自己の課題意識や英語で表現することの喜びを感じることができると考える。

2 学習シート「Hello」の多領域への広がり

本研究では、コミュニケーション活動における即興的な発話力を高めることを目標に、おもに「話すこと、書くこと」の領域について指導を行なってきた。「Hello」を学習することは、コミュニケーション活動において、「話すこと」だけでなく、「聞くこと」や「読むこと」の領域においても、相手が伝えようとする内容を聞き取り理解することや、書かれたことの内容や情報を的確に理解することにもつながる。「話すこと」「書くこと」の学習を多領域に広げることでコミュニケーション能力全体の向上につながると考える。

<参考文献>

- ・文部科学省 『外国語ワーキンググループにおける主な意見（第5回まで） 文部科学省作成資料』（2016）
- ・群馬県教育委員会 『学校教育の指針(解説) 群馬県教育委員会作成資料』（2016）
- ・吉澤孝幸 著 『即興力の育成～「メモに基づいたスピーキング指導」を通して～ 文部科学省作成資料』（2014）
- ・伊藤知弥 著 『自分の考えや気持ち、事実を英語で話す力を高める中学校外国語科学習指導の工夫－小学校外国語活動を生かしたスピーチ活動を通して－ 文部科学省作成資料』（2014）
- ・Canale, M. On same dimensions of language proficiency. In L. Oller (Ed.), Issues in language testing research. (pp. 333-387). Massachusetts: Newbury House. (1983)
- ・Canale, M & Swain, M. Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. Applied Linguistics1(1), 1-47. (1980)

<担当指導主事>

町田 邦江 道上 行彦